

東北震災地を訪ねて（一期一会の出会いの中で）

「動かなければ風は吹かない」と林 尚志神父のことばに押されて震災地を思い切って訪ねることにした。どうしても私の中で「行きたい、行きたい」との思いを行動に移させたのは、先の林神父の言葉だった。シスター山下を誘って計画した。しかし、何ができるか不安だった。釜石市の駅に着いて、駅前の食堂で食事を終えたとき、店の主人は私たちが宮崎から来たことを聞いて、私たちに地震と津波そして大槌町は炎の海になったこと、その炎の中の人々を助けるために多くの人が駆けつけ命を失ったことも話してくださり、まだ見ていない街を想像しながらタクシーに乗った。

タクシーの運転手はすぐ、わたしたちの事を知り、大槌ベースキャンプに着くまで何もかもなくなった街を説明しながらベースまで送ってくださる。このようにスタート地点から出会いが始まり私たちの訪問は神様の恵みのうちに深いものとなった。



ベースキャンプに着くと周りに建物は隣の建物だけ見渡すとコンクリートの建物が半壊して空洞のように穴の開いた寂しげな風に吹かれて3棟ほど目についた。しかし、西のほうには元県立病院跡などみんなコンクリートの部分だけ残りしかも燃えた後の煤で真っ黒になっていた。ほんとうに何も無い家の土台だけの広場になっていた。亡くなった沢山のいのちたちを思った。無言のいのち、あるいは魂たちが居る思いで外に出ることができなかった。

キャンプでの出会いは毎夜なされる分かち合いの中で深まり、また、温かく家族のようになっていった。すぐに旧知の人たちのように和気藹藹となった。

わたしたちは70歳代でキャンプ長は多少心配されたようで、外での活動は参加しないようにと言われた。次の日からキャンプ内の台所や、聖堂のミサの準備など出来る事を張り切って始めた。1日活動を外でして帰って来る方々を笑顔で迎えるのも仕事のうち(?) 「シスターを見るとほっとする」と言っていた。



ほかのキャンプを訪問する機会もいただき、長崎から来られた2人の司祭と共に釜石キャンプ、大船渡キャンプを訪ねた。釜石では仮設の建物の一角に集会所があり、訪ねると20名ほどの高齢の女性がいらして何か手作業が終わったところだった。案内されて座ると、2人の婦人が話しかけてこられ御自分たちの被災状況を話始められた。今回、命を失われた人たちとは出会いはなく、物がすっかりなくな

った方々、との出会いだっただ。

物はなくても、感謝しておられる方たちで戦後と比較しての感謝だった。

大船渡ベースキャンプではキャンプ長の説明を聞いて施設を見学する。ここでは被災の家々は見えずキャンプの周りは普通に生活している地で大槌のようになく、寂しさはなかった。帰りの車のなかで同行の神父様たちに「シスターは



いるだけで良いね。自分たちが話すと構えられてしまうけど、シスターたちは違うね」言われるので「有難うございます。」

「それだけでも来て良かったです。」と答えたがそれは、私たちの不安から解放される時でもあった。雪の道を車で走りながら見る海の方の町は防潮堤があちこち、割れて、水の勢いの激しさを物語っていた。次の日長崎の2人の神父様とのお別れ、その朝はミサで美しいハーモニで聖歌を歌い出発時にみんなで手を握り輪になって「今日の日はさようなら」を歌ってのお別れだった。歌の神父さまはみんなの知る野下神父様と下窄神父様だった。

午後、私たちはマーケットに買い物に行き、帰りに散歩がてら歩いて帰る途中外国人ジャーナリストに出会う。いきなり、「そこに立って、写真を撮らせてください。」と頼まれその後、どこから何しに来たのか質問が始まりとうとう喫茶店でインタビューをさせて欲しいと頼まれ取材に応じた。シスター山下が広島出身と聞き、原爆と震災地を比較したいとのことのようにだった。このジャーナリストは震災直後から9回も来て取材し自国に報道しているとのことだった。スウェーデンのひとだった。次の出会いはお隣の喫茶店の親子でカトリック新聞に記事が載ったことのある方たちだった。

ベースキャンプとこの喫茶店の建物が火災に遭わず残ったけれど「二階までかれきが押し寄せて、片付けが大変で泣く暇もありませんでした。」見落とされた地域ですぐに援助の手がなかったそうだ。去年の12月に再開できたとのこと。津波の時、母親は来ないと思っただのんびりお雛様を下していたとき息子さんが危険を大声で知らせ、車で逃げたけれど渋滞でどうにもならず息子さんの機転で迂回し難を逃れたとか。しかし、避難先ではビニールシートを体に巻きつけ数日間野外に座っていたと話された。「今は、遠方からも震災前のように来て下さるのでうれしいことです。再開して良かったです。」と親子で話された。

最後の日、昼食のためお隣の喫茶店にもう一度出かけた。横に食事をしている親子（私達には夫婦に見えた）に出会った。ベースの左隣の方たちで三階まで水が来て屋根の上で数日助けを待たれた人で何も着るものがなく、雪が降りとても寒かったことなど話して下さった。ベースの家主さんが毛布をなげたけれど何枚投げても届かなかったことも今では可笑しそうに話して下さった。

ベースキャンプ内の出会いは初めにキャンプ長の古木神父様、とても優しく少し照れ

屋さん熱く愛とやさしさを話してくださったがいつも、御自分が実行されていることで、小さい人、助けを必要としている人をどこまでも大事にするお人柄だった。そのかたに、「また来てください。」とお別れのときに言われ、「これ以上ない褒め言葉です。」と私たち2人は心温かくしあわせな気持ちで帰ることができた。

ベース長を支える片岡さん、「私たちの申し込み書を見てがっかりしたでしょう？」と言えば「過去に八〇歳もいました」と温かい語調で応えて下さる。

片岡さんの婚約者は素朴な佐賀弁で話してくださるからほっとできていた。帰りに「シスターさんたちが帰られるけん寂しいなる」と言ってくださった。

厨房担当の小河原さんは主婦だからかお人柄かお母さんのようにみんなに気を配って温かな家族的雰囲気を作り出していた。

あと、ここを訪れるボランティアの方々、純心のシスターズと学生志願者、鹿児島から一人で参加したKKさん、大分のAさん、長崎神学院の院長さんとB神学生など等ほかに、メキシコからの2人の若者東京のY君みんな善意のいっぱい溢れた心優しい人達だった。出会ったみんなに「ありがとう」と言いたい。これらの人々は私の中に今日もいきいきと出会っている。

文責 シスター植木脩子

